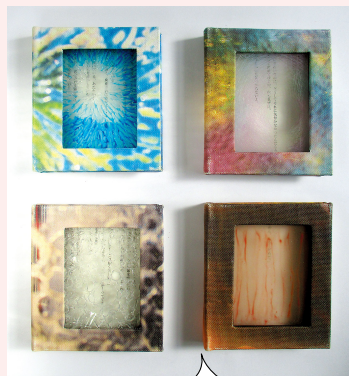


武蔵野美術大学に眠る マンガの才能たち

美大で「美術・デザイン」を主体的に学びつつ、「マンガ」を個人的に描く学生はいまや少なくない。一見距離があるように感じられる両者だが、その2つを追究する理由はどこにあるのか？ 武蔵野美術大学の学生に話を聞いた。

●取材・文 編集部 ●写真 川瀬一絵 [ゆかい]

油絵学科 版画専攻3年 松澤彩子さんの作品



上のマンガは、松澤さんによる今年に入ってから作品「かたつむりの町」。松澤さんは、鉛筆で線画を描いてからスキャンし、CLIP STUDIOで仕上げる。下は、松澤さんの大学での課題作品。オブジェのような立体的な造形の本がユニーク

私立美術大学の名門として知られる武蔵野美術大学（東京都小平市。以下ムサビ）。造形学部11学科のうちの「油絵学科」は、油絵専攻と版画専攻の2つの専攻があり、一学年で約130人強の学生が在籍する人気の学科だ。絵画や版画の世界を広く学べる学科だが、そこに〈絵を描く〉という表現において共通点を持つ「マンガ」を、趣味で、さらにはプロとして仕事で描く学生がいた。

突き詰めたい表現を 美大に入って探す

ここではマンガを描く2人の学生を紹介していこう。松澤彩子さんは、版画専攻の3年生でサークルでは「文芸部」に所属、趣味でマンガや童話などを手がけている。もうひとりの鶴田かりんさんは油絵専攻で、サークルは「漫画研究会」に所属。鶴田さんはすでに「星樹スズカ」名義で季刊誌「ジャンプSQ.CROWN」でデビュー、これまで同誌や後継誌に4作品が掲載されている。

油絵学科といえば、毎日大きなキャンパスに向かい合うというイメージ。ポップカルチャーである「マンガ」は、読みこそすれ「描く」ことには距離があるように思える。が、それは浅はかな考えのようだ。子どものころから当然のようにマンガに親しんでいる彼女たちは、最初にマンガという表現と出会い、その後、青年期に美術・デザインという存在に自覚的に向き合うようになる。「マンガ」と「美術・デザイン」、そのふたつ

に意味のない「壁」は感じていないようだ。

例えば松澤さんは、マンガをはじめ、どのような分野で自分を表現することができるのかを探りたくて、ムサビを受験したという。「マンガ家になることだけを目指すのだったら、専門学校に行ったほうが効率的だし、なれる可能性も高い。でも自分の場合は、ちょっと違うなと。

高校生になった頃まではマンガばかり描いていました。でも、美術部に入ってから油絵などを経験して世界が広がった。そこから自分は何が向いているのかを探りたくてムサビを受験したんです。なので、ムサビに入ってから、油絵はもちろん、本を作ったり、オブジェを作ったりと本当に手探りでいろんなことをやって、最近になって、またマンガに戻ってきたんです。いまはすぐマンガを描きたい」

自身の表現のためにさまざまな手法に体当たりでぶつかっていく中に、「マンガ」というジャンルが自然な形である。いまの美大生のひとつの在り方なのかもしれない。

大学の課題以外は マンガしか描かない

対する鶴田さんは、ムサビに入学してからはマンガに向かい続け、現在はプロとして商業誌で活躍する。

「小学校の頃からマンガ家を目指していました。わたしの家庭は、父親がTVゲーム制作会社に務めていて、母親は写真家。両親ともが芸術系なのでわたしのやりたいことを理解してくれ、当時マンガの投稿をするのも応援してくれ

ていました。でもそれが重荷な面もあって、中学3年生からめっきり投稿しなくなってしまいました。それをまた父親に咎められたりして……。高校では油絵や日本画に会って、ムサビを受験したんです。正直、もうマンガ家にはなれないんじゃないか、と思っていたのですが、結局入学してからマンガをまた描きはじめて、プロとしてデビューすることができました」

3年生になった現在、鶴田さんは授業の課題以外は、マンガに集中しているという。「同級生が油絵で個展をやっているのを見ると、自分もやってみたいという気持ちもあるのですが……いまは休日でもマンガを描いていて手がまわらないんです」。

この先もマンガを描く？
悩ましい就職先

ここで松澤さんから鶴田さんに質問があった。「マンガと大学の課題というのは、意識的に分離しているんですか?」。確かに美大生が授業とマンガをどう両立させているのかが気になるところだ。

「そこが難しくて。やはりプロでマンガを描いている先輩がいるのですが、その人は抽象画のコースでマンガ的な表現を混ぜたような絵を描いていて。でも、自分はマンガと油絵を合体することができない。油絵だったら写実的に描きたいし。いまはそこを切り分けてますね」(鶴田さん)

「そうなんです。自分は逆にいろいろなものが切り分けられてなくて。課題やマンガを含め、

いろんな表現の間をフラフラしてます」(松澤さん)

学生らしく、誠実に悩みながらマンガを描く松澤さんと鶴田さん。2人は就職に関してはどのように考えているのだろうか。

「いまはジャンプSQ.RISEでマンガを描かせてもらっていて、そのまま描き続けたいです。打ち切られたとしても、その間はアルバイトをしてでもやっぱりマンガでやっていきたい。だから、いわゆる就職活動はしない予定です」(鶴田さん)

「わたしは出版社に就職したいと思っていて、

油絵学科 油絵専攻3年
鶴田かりんさんの作品

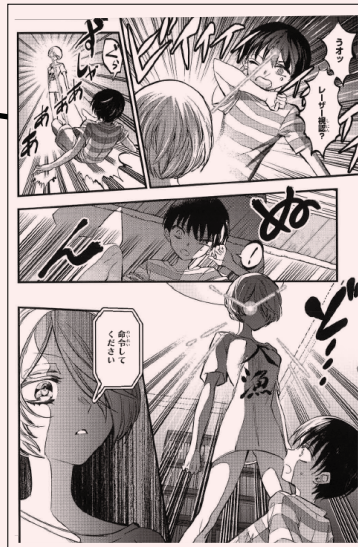


右のマンガは、季刊誌「ジャンプ SQ.RISE」に掲載された作品「I love doll」。近未来の「疑似少女ロボット」との心の交流と恋心を描いた作品。基本、CLIP STUDIOを使ってフルデジタルで制作されている。上は学校の課題作品として描かれた油絵だ

いま絵本を出している出版社にインターンを申し込んでいるんです。でも、学生の残りの1年間で変わったりするのかもしれない……」(松澤さん)

いまムサビの就職率は非常に高い。かつては美大に入ると就職は教員しか選べないと言われたこともあった。しかし最近は日本画や油絵学科からアニメスタジオ、ゲーム会社などに就職する学生も多い。

マンガを描くこと、絵画の制作を極めること。未来に悩みながらも、彼女たちに可能性は広がっている。



© 星樹スズカ / 集英社

